本棚

白鳥和生　編

『なぜ野菜売り場は入り口にあるのか ──スーパーマーケットで経済がわかる──』

本書はスーパーマーケット業界について知りたい人への良い入門書です。

タイトルに『なぜ野菜売り場は入り口にあるのか』と見て、「そういえば、どうして？」と思って本書に手が伸びる。ですが中身はそれだけではありません。『スーパーマーケットで経済がわかる』ように、スーパーマーケットを多面的に分析、描写しています。

食品スーパーマーケットは誰でも使っていますし、パートを含めると家族や知り合いがお勤めになっているという方も多いでしょう。つまり身近なわけです。私の場合、食品を買うなら少し遠くてもまだ開いている時間なら食品スーパーにまずは向かいます。また、前職で社債投資をしていた頃は、景気が多少悪くても人が食べなくなることはないから、安定している業界の代表格として見ていました。弊社に移ってからは、食農バリューチェーン全体の出口として業界を見ています。また、JAグループの一員として、農協系統で運営するAコープ事業へ何か貢献できないかとも思っています。

身近ではあっても、どうやって店舗・会社が経営されているのか、そして業界全体としてどこに向かっているのか、わかりやすく説明してくれる書物は案外少ない。本書はそういったニーズによく合っていると思います。

特に面白いと思った部分を挙げていきます。

まず、「第３章　２高齢化で変わる売り場」は新発見が多かったです。セルフレジで後続の方を待たせることに焦る高齢者に対応した「スローレジ」のことや、（天井から吊り下げることが多い）商品の案内表示を、目線が下に行きがちな高齢者を意識して床面表示する店があることなどが紹介されていました。高齢者向けの対策と言えば、「とくし丸」のような移動販売車のことしか頭にありませんでしたが、こうした試みももっとあってもよいのだろうなと思いました。

また、章を問わず全体通じて食材の話が多くて楽しいです。とりわけ「第３章　４貧しくなる消費者」で、所得層ごとに食品の選好が異なることを指摘しています。これは、分厚い中間層と言うものが前時代のものになりつつある今、生産者団体としても気になる話です。

「第６章　１AIが変える未来のスーパーマーケット」での、惣菜の値引きタイミングをAIが決めるという話も、ネットスーパーの話もきわめて今日的で面白かったです。

他方、「第５章 食の『買い負け』が安全保障リスクに？」は、人口爆発やエシカル消費にも及んでいますが、世界の大問題をスーパーに背負わせるための論を展開するよりも、むしろ食品スーパーマーケットの経営にもう少しこだわってもよかったのではないかなと感じました。

2026年２月のスーパーマーケットトレードショーの懇親会の挨拶にて、全国スーパーマーケット協会の会長は、政府が食品の消費減税に取り組むというのは結構なことだが、国民に安くてよいものを提供するのはもともと我々の業界の役回りだ、と気概を示しました。この業界にはこういう元気な方々が多いのですから、彼らの心意気をもう少し活写してもよかったかもしれません。私の問題意識に応えてくれるのであれば、惣菜のバックヤード調理の話からセントラルキッチンに話題を広げたり、業態としての進化形態である「まいばすけっと」や「トライアルGO」の評価、あるいは企画されているとされる「Ｌミニマート」への筆者の見解も見たかったなという気はします。

業界のことをもっと深く掘り下げたい方は、次は全国スーパーマーケット協会の『スーパーマーケット白書』などにお進みいただくのが良いかと思います。もう少し軽いもので、ということでしたら、小説ですが江上剛（2019）『二人のカリスマ上下巻』（日経BP）、さらには絶版ですが平松由美（1989）『青山紀ノ国屋物語』（駸駸堂出版）などもあります。

ちなみに、タイトルの『なぜ・・・』の答えは手に取って確認することをおススメします。

──朝日新聞出版 2025年11月
定価900円（税別）227頁──

（常務取締役　小畑秀樹・おばた ひでき**）**

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/